



を決定していった。

神戸ビエンナーレは、従前に評価されたアート概念とは異なる公募作品が多く集まる芸術イベントとして認知されるようになり、実験的な作品を多く入賞展示できる祭典になり、展示後に国際的な賞を取得する作品も毎回あったが、萌芽的なゆえに熟成度に乏しい作品や評価が別れる作品が展示される側面もあった。しかし、多くの作家や市民にとっての発表であることには変わりなく、多種にわたるさまざまなコミュニティにとっての時事性に溢れる作品が集まる祭典として、多くの一般入場者による人気や評価の高さはリピーター数やSNSでの投稿などにも顕著であった。特に、これまでにない分野の作品を募集するコンペティション形式を取り入れていることにより、メジャーなアートシーンには登場していなかった作家が多く参加し、その多くが継続的に応募するリピーターともなっていき、独自で地道な芸術活動をしている参加作家の多い芸術祭にもなっていた。

地域性とジャパンコンテンツを重視しながらも、2014年に世界各国のビエンナーレ関係者の活動基盤として発足した「国際ビエンナーレ協会(IBA)」にも加盟し、入賞作家の海外出展や国内外の芸術祭との連携・参画など、国際的にもユニークな取り組みを発信し始めている。また、第5回展では、これまでの神戸ビエンナーレが評価・育成したコンペ入賞作家を招待作家として招聘するという理想も実現できた。

時事性と地域性を重視した先取・萌芽的表現の多い神戸ビエンナーレの10年は、独自のアート感覚とバラエティー豊かな人たちが多く集り、人気や評価も、世代や専門の差も含め、さまざまな見解が錯綜する歩みでもあった。